MB Derma, 67 : 154-157, 2002.

◆特集／美容皮膚科・美容皮膚外科実践マニュアル

ピアスをめぐる知識
ーピアッサーから肉芽腫までー

高橋知之*

Key words：ピアス(pierced earrings)，ピアッサー(piercer)，金属アレルギー(metal allergy)，ピアス皮膚炎(earring dermatitis)，耳介腫瘍(earlobe tumor)

Abstract　穿孔用ピアスがあらかじめ装填され滅菌されたディスポーザブルピアッサーを用いるとピアスがそのまま留置されるので安全にピアッシングすることができ，またピアス皮膚炎を起こしてもシリコンリング治療を行なうことでピアス孔を温存しながら治療することができる．ピアスにまつわる診療は高度な技術を必要とするものではないがそれなりの知識は必要である．ピアスを取り巻く現状を述べた．

はじめに

ピアスを取り巻く環境はこの10年間に大きく変化し，今やピアスをするという習慣は完全に社会的認知を受けて女性ばかりではなく男性にもごく普通に浸透している．以前は安全ピンや画鋲で穿刺して不衛生な状態でピアスを留置することが日常茶飯事に行われ，感染・化膿・金属アレルギー等の原因となっていた．

現在は専用の穿孔機が普及して安全にピアッシングできる環境が整っているが，ピアスをはじめる人の低年齢化が進行し衛生知識の欠如により「安全ピン」復活のきざしやボディピアスと呼ばれる耳垂以外の部位へのピアスの流行等，新たな問題が発生している．以下，ピアスを取り巻く現状を述べる．

ニードル対ピアッサー

安全ピンで穿刺してピアスを留置するという行為は医学的・衛生学的に危険であることは論を待たないが，医療機関によっては注射針で穿刺してピアスを留置するといったことが今も行われているというのも事実である．

安全ピンであっても注射針であっても留置したピアスと孔の間に隙間が生じるので血液が貯留する．ピアスが留置された耳垂はガーゼ等で被覆されない状態で自己管理にまかされるわけで，管理が悪ければ貯留した血液に細菌感染が起きて創傷治癒を阻害する．すなわち，医療機関で注射針を用いて衛生的に穿刺しても安全ピンで穿刺することと何ら変りはないのである．

滅菌された穿孔用ピアスをピストル様の装着器〔ピアスガン〕に装填してピアッシングする方法と穿孔用ピアスがあらかじめ装填され滅菌されたディスポーザブルピアッサーを用いる方法(図1)がこの10年で普及した．これらの方法では穿刺針たるピアスをそのまま留置するわけであるから出血することはない．そのため，ピアッシング後の感染率を著明に低下させることができる．

注射針で穿刺しアクセサリー用のピアスを留置した場合ピアッシング後3か月以内のピアス皮膚炎の発生率[1]は31.5%(741/2352)と高頻度であったのに対して，ピアッサーやピアスガンを用いた場合は半分以下であった(表1)．

* Tomoyuki TAKAHASHI, 〒150-0041 東京都渋谷区神南1-12-16　渋谷高橋医院，院長